

芸術と工学・科学的手法による英彦山修験道文化の 再興

知足, 美加子
九州大学芸術工学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7432212>

出版情報：形の科学シンポジウム予稿集．11（1），pp.7-8，2026-06．形の科学会
バージョン：
権利関係：



芸術と工学・科学的手法による英彦山^{ひこさん}修験道文化の再興

知足美加子^{ともたり}

九州大学 芸術工学研究院（福岡市南区塩原 4-9-1）

tomotari@design.kyushu-u.ac.jp

Revitalizing the Shugendo Culture of Mt. Hiko Through Art , Engineering , and Scientific Methods

Mikako Tomotari

Kyushu University, Faculty of Design

Abstract: Due to the destruction of Buddhist artifacts, the Shugendō tradition has nearly been lost. Therefore, this study restored and analyzed the destroyed cultural properties by combining 3D data with artistic techniques. Furthermore, based on an investigation of sacred tree worship using DNA analysis, wooden Buddhist statues were created to contribute to the revival of the cultural value of Shugendō of Mt.Hiko.

Keywords: Shugendo, Restoration, Art, 3D Data, Forest Culture

研究背景と目的

英彦山^{ひこさん}（福岡県）は三大修験山の一つだが、明治維新の神仏分離令（1868 年）と修験宗廃止令（1872 年）、廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}により仏教遺物の殆どが破壊されている。口伝伝承を旨とする修験道文化において文献資料は乏しい。そこで本研究は英彦山修験道美術に着目し、破壊された文化財の復元を通して修験道文化と仏教、神道等の宗教的表象の関係を探る。3D データと芸術技法を組み合わせた復元、および DNA 分析による霊木信仰の調査に基づき、英彦山修験道の文化的価値を再興する。

今熊野窟磨崖石仏《阿^あ弥^み陀^だ三尊像》の復元

英彦山今熊野窟（通称梵字が岩）には「嘉禎三年銘磨崖石仏」（図 1）と「月輪大梵字」が造形されている。これらは像名・像主・願文・制作年（1237 年）を有する全国でも唯一の磨崖石仏である¹。碑文には、阿弥^あ陀^だ三尊が彫刻されたことが記されているが、三尊の内の一^{いち}体しか岩壁に残されていない。そこで本研究は、磨崖石仏と崩落した岩盤群を 3D データ化することによって、崩落以前の全体像を再構成し、阿弥^あ陀^だ三尊の存在を実証する。そのためにまず、磨崖石仏とその周辺部分、約 20m 下方にある覆屋内の観音菩薩像^{かんのん}を 3D 計測し、縮小した岩盤群を立体プリンターで出力した（図 2）。その結果、勢至菩薩像^{せいし}と手前に崩落した岩盤の線刻形状が繋がることがわかった。阿弥^あ陀^だ三尊の主尊は「岩壁の曲がり角にあたる部分」を利用して彫刻され、三^{さん}昧^{まい}の仏像が放射線状に広がるようにレイアウトされたと推測される。また、勢至



（図 1）《今熊野窟磨崖石仏》1237 年
（図 2）「阿弥陀三尊像想定模型」

によって、崩落以前の全体像を再構成し、阿弥^あ陀^だ三尊の存在を実証する。そのためにまず、磨崖石仏とその周辺部分、約 20m 下方にある覆屋内の観音菩薩像^{かんのん}を 3D 計測し、縮小した岩盤群を立体プリンターで出力した（図 2）。その結果、勢至菩薩像^{せいし}と手前に崩落した岩盤の線刻形状が繋がることがわかった。阿弥^あ陀^だ三尊の主尊は「岩壁の曲がり角にあたる部分」を利用して彫刻され、三^{さん}昧^{まい}の仏像が放射線状に広がるようにレイアウトされたと推測される。また、勢至

菩薩像手前の崩落岩盤に阿弥陀仏が彫刻されていたことが明らかになった²。

《彦山三所権現御正体》の復原

国指定文化財《彦山³三所権現御正体》(図3)について、非接触3Dスキャナを用いた分析により欠損部分の宗教的要因を調べた。その結果、仏教の意匠である「光背」や「蓮華」と、神道の「神像」が混淆した「神仏習合^{しゅうごう}」の表象が意図的に省かれたことがわかった。御正体は廃仏毀釈を免れるため、約120年間別々の場所に隠されていた。伊弉諾尊像は光背を排除され、神像として山頂の「上宮」に置かれた。伊邪那美尊像は、神仏習合の意匠だった神像は破壊され、神道の鏡として「下宮」に置かれた。天忍穗耳尊像は、僧形仏像としての破壊を免れるため「奉幣殿」宝物庫に隠されていた⁴。失われた伊邪那美命像は、江戸期の《彦山垂迹曼荼羅^{すいじゃくまんだら}》と他二軀の3Dデータより創造的に復原した。

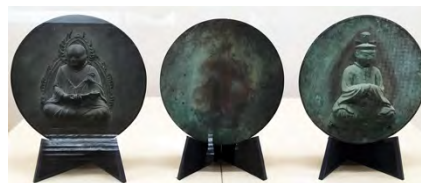
奉幣殿再建 400 年を期に英彦山修験道再興の機運が高まり、復原された《彦山三所権現御正体》(図4)は新たな英彦山神宮御神軀となっている。

英彦山霊木信仰と《鬼杉不動三尊像》の制作

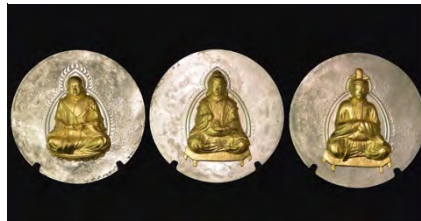
英彦山修験道は霊木を神仏として崇敬し、特にスギを中心とした森林環境を護持してきた。南岳には樹齢約1300年の国指定天然記念物「鬼杉」(図5)が存在する。1600年に徳川家康の裁許のもと、山中の竹木持ち出しを禁じる法が決している。森林遺伝育種学専門の渡辺敦史⁵は霊木のDNA分析を行い、鬼杉群が氷期以前の天然スギの子孫であり、修験者が挿し木によってスギの血統を継続させた可能性を示した。これらの修験道思想と科学的根拠に基づき、霊木を用いた不動明王像(図6)を制作することになった。1991年の台風により落下した鬼杉の枝(径70cm)を素材とし、不動明王《鬼杉不動三尊像》を制作した。不動明王は修験者を護り導く存在である。

修験者にとってスギは「自然界の諸要素」を結ぶ信仰上の象徴である。スギの挿し木技法は修行で獲得する「擬死再生」の概念を具現化・涵養してきた。また、天と地をつなぐ柱という「神道」の概念と、成仏のプロセス(発心・修行・菩提・涅槃)という「仏教」の概念をつなぐメタファーとして機能する。現在、《鬼杉不動三尊像》は英彦山神宮下宮の信仰対象となり、参拝者増加に貢献している。

(本研究はJSPS科研費JP25580044,JP16K02314,JP24K00031の助成を受けている)



(図3)《彦山三所権現御正体》鎌倉期



(図4) 知足美加子《彦山三所権現御正体復原》2016年



(図5)「鬼杉」
樹齢約1300年



(図6)《鬼杉不動三尊像》2025年

¹ 八尋和泉「今熊野窟嘉禎三年銘磨崖仏」『英彦山修験道館展示資料』1987年 p.33

² 拙稿「3Dデータ化による修験道美術の再現-英彦山今熊野窟を中心に-」『山岳修験 54』2014年 pp.76-92

³ 英彦山は「日子山」と呼ばれていたが、弘仁10年(819)に嵯峨天皇の詔によって「彦山」に改められ、享保14年(1729)に霊元法皇の院宣により「英彦山」となった。

⁴ 拙稿「廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復元的考察-豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動明王立像-」『山岳修験 62』2018年 pp.49-67

⁵ 渡辺敦史「霧島神宮スギ御神木と英彦山神宮に残るスギ古木群の由来からみたスギ植栽に対する思想の相違」『山岳修験 74』2024年 pp.73-88